

## 本当は解ってるアート

誰もが

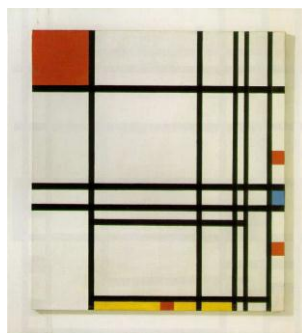
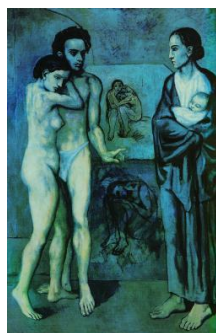
社会福祉子ども学科 教授 酒井道久（美術）

よく耳にする言葉で、「ダヴィンチとかゴッホとか印象派は好きで解るんだけど、ピカソとか抽象画はわかんない」というのがあります。

つまりダヴィンチ、レンブラント<sup>④</sup>、ゴッホ、印象派、平山郁夫＝具象＝わかる

ピカソ<sup>①②</sup>、モンドリアン<sup>③</sup>、ミロ、キュビズム、草間弥生＝抽象＝わからない  
という構図です。（※ただし、ピカソは抽象ではありません。）

さて、ここで美術、芸術について解るとはということなのか、考えてみましょう。ピカソが出たついでに、ピカソについて少し。ピカソと言うと私が子どもの時から現在でも、「天才」、「解らない」、等々と彼の作品を観ないうちからレットルを張っておしまいにしている人がほとんどです。ピカソの関しては評論、画集、伝記など数えきれない量の情報がありますから、ここで多くは述べませんが、私がピカソのすごいところを1つ挙げるとするなら、それは、平気で変わることです。子どものころから巧みなデッサンを描き、10代で写実をマスターし、その後「青の時代」<sup>②</sup>、「バラ色の時代」、「キュビズム」、「シュールレアリズム」、と変化し続けます。これほど作風が変わり、それぞれの時代でいくつもの傑作を生み出したアーティストがこれまでいたでしょうか？ 下のピカソの2点<sup>①②</sup>をご覧ください、とても同じ作家が描いたとは思えません。普通、ピカソはわかんないという人は、アフリカ彫刻の影響を取り入れた「アヴィニヨンの娘たち」などキュビズム時代以降の作品やヒラメのように目が左半分に着ている「泣く女」<sup>①</sup>などを観て「わかんない」と言っていると思います。しかし、青の時代の作品を観ていけば、「ピカソはわかんない」という言葉は出てこないのではないのでしょうか。



①ピカソ「泣く女」 ②「ラ. ヴィ」 青の時代 ③モンドリアン「コンポジション No.8」 ④レンブラント「テュルプ博士の解剖学講義」

さて話を戻して、なぜピカソの「泣く女」やモンドリアンの絵<sup>③</sup>や草間弥生の水玉だらけを解らないと言い、同じピカソの青の時代の絵やレンブラントの絵<sup>④</sup>や印象派のモネの睡蓮や平山郁夫の風景画を観て、こっちは解るというのでしょうか？ いったい何が解らなくて何が解ったのでしょうか？たぶん自分が慣れ親しんでいる人間の像が人間っぽく描かれているから「人間が描かれている」、「植物が描かれている」、「田舎の風景

が描かれている」、…、ということが解ったと言うに過ぎません。しかし、もしこれで絵が解ったというなら、絵なんか図鑑のようで知識として記憶されるだけです。つまり何をモチーフ（主題）にしたかが判っただけで、そのことは感性とか感動とは何の関係もないのです。

一方ピカソの「泣く女」は、泣いているらしい女性、帽子をかぶっている、と判るのですが、普段見慣れた女性でもないし、なんで顔がぐちゃぐちゃなのか？顔色も変だし、…、モンドリアン<sup>®</sup>や草間弥生の絵に至っては、「いったい何だ！ただの模様ジャン！私でもできるぞ！」と、解る以前に怒り出すかもしれません。しかし、「鮮やかな色だな」とか「すっきりして気持ちがいいな」など、何を描いているのか説明はできなくとも何か感性を刺激される人もいると思います。

「でもやっぱり、抽象画は解んないよなー」と食い下がる方のために、同じ芸術の音楽で考えてみましょう。皆さんが日常でよく耳にするポップスや演歌、クラシック音楽、ジャズなどでは、曲名や歌詞からある程度の情景を浮かべることが容易にできます。恋の歌、失恋の歌、がんばれという歌、故郷を想う歌、…。これらの曲名と歌詞にさらにメロディーが加わることで、より豊かなイメージ作りがなされます。では曲名だけで歌詞のないメロディーだけの音楽、例えばショパンの「子犬のワルツ」、ドビュッシーの「月の光」、また歌詞があっても外国語で意味が解らないオペラ、ポップスやジャズではどうでしょう。さらに曲名がありながら「交響曲第5番」、「バイオリンコンチェルト第2番」とか、「ピアノソナタ30番」などと曲名を聞いても何の役にも立たない場合もあります。それらはメロディーとリズムだけの抽象的な音符の羅列だけで聴く人の感性に響き、それぞれの情景を浮かべたり、気分が高揚したりするのです。これは美術の抽象画に似ていませんか？抽象画の画面には音楽の歌詞にあたるような認識できる形や色がほとんどありません。抽象美術は音楽のメロディーのようなものと思いませんか？つまり、描かれたもの自体は意味が不明でも1つの作品となると感性に響くのです。

芸術が解るということは「きれいだな」「面白い」「素敵な色だな」「いい形だな」と感じるばかりではなく「きったねーなー」「怖いな」「気持ち悪い」と感じることも含まれます。何かを感じることが解るということです。何かを感じたら、その作品の90%は解ったということではないでしょうか。ですから言葉でうまく表現する必要はないのです。岡本太郎が本当の芸術は「なんだ、これは?!」と思うものだと言っていました。彼は縄文土器を見たとき、そのエネルギーを感じて「これはなんだ?!」「芸術は爆発だー」と言ったのです。言葉で解説するのは批評家や研究者に任せておけばいいのです。

ただし芸術が解ると言っても数学みたいに正解はありません。答えは人それぞれだし、さらに同じ人でも年齢によっても、あるいはそのアートに接した時の体調によっても感じ方は変わってしまいます。期待でいっぱいだったコンサートも満腹で眠気のため少しも感動しなかった、待望の名画を前にしても仕事でイライラしていて集中できなかったとか。ですから、アートで本当に感動するということはそんなに頻繁にはないし、年に一度でもそんな機会に巡り合えばその人は幸せと言えるかもしれません。

いろいろと語りましたが、やっぱり芸術は説明できませーん！！

だから素晴らしいんです